

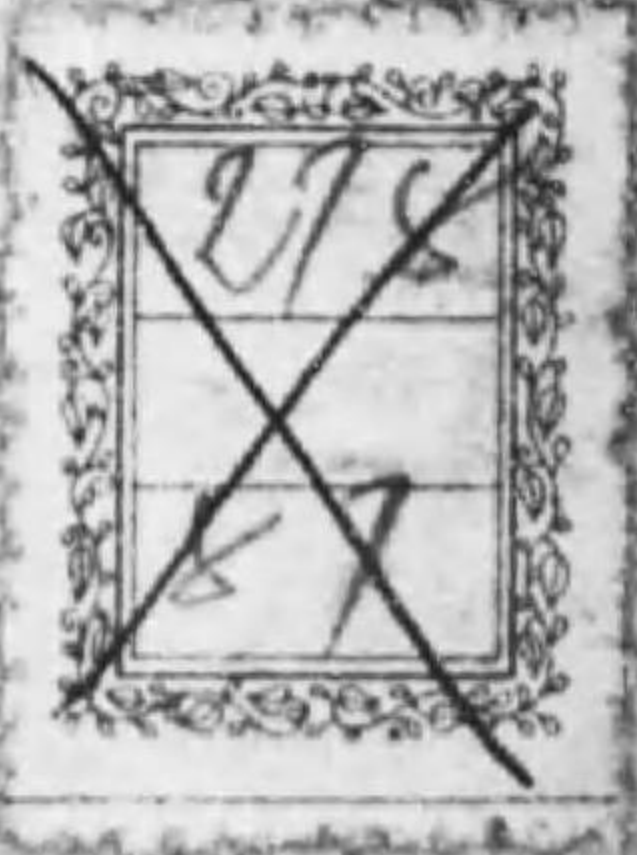
曲譜
正調

筑前琵琶歌

水也田旭嶺秋

特 110

411



始



110
411

序

近時我が邦前琵琶も旭日昇天の勢を以て家庭音楽として紳士淑女の間へ歓迎せられ亦一方は劇界に迄も琵琶を善く利用する様は成りて茲數年間に急激の發展を以てしたるが之に伴つて著書も澤山發行されて居りますが曲譜の正しく文章の向澤の年0完全著書の無いのは實に嘆かちい事でありませう

茲に於て編者が多年の研究したる正調なる曲譜を(次)表(内)初傳(夏)中傳(秋)奥傳(冬)皆傳の四巻に分ちる本書を發行せんとする者也

大正三年九月

水也 旭嶺 識

正 12.1 交
3 表 内 初

目次

川中島	一頁	泉の三郎	五五頁
湖水波	一一頁	小楠公	六三頁
夜の鶴	二〇頁	勸進帳	七一頁
伏見の吹雪	二八頁	義民の電鑑	八一頁
佐渡の若竹	三七頁	隅田川	八九頁
佛御前	四七頁	吉野靜	九七頁

曲譜及曲節

一三四五六七八甲乙	音調
人	合の手の譜
山	流しの譜
春	春節
夏	夏節
秋	秋節
冬	冬節

山

山越節

旭

旭節

ク

雲節

ツ

露節

月

月節

夕

夕日節

可^風

大落一小落し

フ

憂愁譜

々

悲哀の譜

山

崩勇壯の譜

☆

五絃節及十二段秘曲の合手

∞

吟變(例せば五六の中間の声)

|

續き

○

歌又は歌の類

□

詩又は詩の類

番、号、丁、鳥、名
木、火、土、金、水、地、天

琵琶の合の手

Handwritten musical notation consisting of six curved lines with various markings, likely representing a melody or rhythm.

淘ゆり伸のび上あげ

伸のび上あげ

淘ゆり伸のび下さげ

伸のび下さげ

抄すひ上あげ

強つよめ

大おほま廻まわ淘ゆり伸のびべ

淘ゆり廻まわべ

筑前琵琶歌

真傳の巻

水也田旭嶺 編纂作曲

川中島

天文二十三年秋八月

越後の國春日山の城主

上杉入道 謙信

三千餘騎を引率し

川中島に陣取

其時謙信申さるる水

加賀越前の奴原は

我父上の仇なれば

之れを屠りて其儘に
三 覇を中原に立てんとは
四 彼の村上が餘儀なき頼み
三 心ならずも信玄と
四 人生朝露の身を以て
一 口惜しふ次第なり
三 敵の旗本切り崩し
水

二 旗を都に押し立て、
三 兼おての願ひなり
四 武士の面目もだも兼
三 互に鍛みがかま
四 四郡の土地を争ふは
七 されば此夜の合戦には
五 一騎打ちも兎も角も

有無の勝負決せん
隊伍整々旗鼓堂々
五 其武者押の勇
五 目に狐狸の跳るを待す
百獸摧破裂す
暮上 洩る朝日の影
散りゆく跡を見渡せば

四 揉みに揉んで進
六 哉風四方を拂ひたる
五 猛虎深山を行く處
四 獅子月明に吼ゆる時
日 早や東雲の雲の間
四 四方の河霧河風に
旗は物成押立て

真黒々の園陣は

進むが如く退く如く

是謹信が極意なる

大ハ油断すな破られな

罵り驕ぐ武田勢

色めも立ち見えたに

もり返さんも難儀なり

必死期せ越後勢

廻り廻れる駆引は

車掛りの軍法

我が旗本を固めよ

二萬と聞え大軍

浮足立ち兵なれば

此岸川の彼岸に

一と先づ勢を揃へん

河岸近へ寄り

真の駿馬に黄の羽織

此方を目掛馳せ来るは

訝り合へる一刹那

防兵士次斬立蹴立て

只獅子王が暴れ出下

天晴れ武功の伝玄が

遠かに見ゆる武者一騎

白頭巾をかむりつ

敵か味方か何者と

馬は疾風かいなつまか

殺倒したる有様は

群がる羊を討つ如く

五 面を向けん人もな
火車

五 早や眼前に迫れど
金

四 稲葉の末に吹く風の

池の真菰や河の草

同ト姿の武者七人

六 氣早の謙信之れを見

五 越後鍛への巻の冴之

六 勢ひらんだる謙信は

四 老功無双の伝玄は

三 りよも動かぬ大磐石

何れをわれと分ふかぬ

落着き拂つて居たりけり

五 武者振見事や武田殿

五 今ザ参るがごとく大音聲

三尺二寸の長光哉

暮然に斬り掛る

サレモ鋭さ太刀風を

受け一軍扇斬り折す

尤の肩先幾矢と切る

肩に掛つて睨み下げ

正興磨時作磨生

川中島

大上段に振りかぶり

陽炎稲妻摩利支天

扇揚げて受止むる

疊み掛けたる二の太刀は

漬り上げ一三の太刀

獅子吼の勢も凄しく

谷へは毛筋のすばりけ

七

人情塵より唐竹割り

声に應とて嚴うかに

紅煙上一片雪

微かに笑を合みけ

莞爾と笑そ言葉

小枝指とて走りける

去るにも追はる人かな

夢中もよと問は掛けたり

根太は声はひびきけり

卷へ一人の唇も

心憎くや思ひけり

駒引も返一匹だ一騎

来るに止むる者もなく

千軍萬馬の其中哉

縦横自在に駈け廻る

敵も味方も目見張り

手に汗握る計り

鞭声南々夜渡河

遺恨十年磨一劍

遺恨十年磨心

河ち漏らせども後の世に

傍若無人の振舞に

サレヨくと打守り

曉見千兵擁大牙

流星光底速長蛇

劍のもじに大敵

氏道の花とたへられ

千隈の河の水張下
譽れ流し給ひけれ

香ばしき骨の
譽れ流し給ひけれ

湖水液

南部氏作

一 丈れ良禽は林は探み
二 されど一旦身は許し
三 善悪どもに身は捨し
四 忠義をなすも武士の
五 茲に明智日向古光者は
六 味方もろくも打ち敗れ

一 賢者は君は探むるかや
二 主と頼み一人のため
三 傑狗が竟に吠ゆるなる
四 予矢の意地と知れけり
五 天王山の一戦は
六 同勢四方に散亂す

湖水液

一一

三 早や匿れなく聞之けり

四 明智太馬介光俊は

五 軍の様子見んもの

敵に栗津の原越えて

四 大津の宿にかゝる頃

五 堀秀政が一萬騎

敵勢茲に来るからは

四 安土の城の番守居る

五 君の先達の覺束なく

急げば廻る瀬田の橋

探みに探んぞ打出の淡々

ハツタと出面り大軍は

三 光俊キツト思ふや

君の妻子のおもひ

四 坂本城より大軍なれ

四 小冠者原に出遇ふ

末代迄の無念な割

光俊やがて大音聲

天王山攻取り切り

三 光俊が一期の名残り

五 味方の勇姿勵して

四 さは去乍ら今茲に

四 捨も合はふぞおんる

一ト當りて返さばやと

七 やをれ秀政来りか

五 武畧は流石の敵なるが

五 語り續がせん者ど

四 咄と許りに突掛り

巴田字に切り落付

鬼神不思議の働ま

浮足立ちし汝全

さつと許りに乗り脱

馬は忽ち飛ぶに

さんぶと許り躍り

騎手は素より古今

西に東にゆつ没

さうらの大敵も

爰と見入る一呼

一息吞み掛け声

名に負ふ近江の湖

馬は天下の逸物

真一文字に乗り

神か人か見るばかり
眼の限り一碧の
緋絨着たる大馬之
無双の名人永徳が
墨繪の龍の陣羽織
或は緩に又急に
馬疲るれば人助

水や空うらや水
浪は蹴立つる大鹿毛に
丹精このを畫さたる
比叡山嵐に龍へ
揚鞭振ふ勇ま
人疲るれば馬に頼

五 さーもに廣く湖哉
四 進手の勢も早や致され
三 向れよぐと云ふは下
二 射掛ける人もなかりけれ
一 濱の北の方に打ち上り

一六 事ごもせざる不敵に
四 醉へるが如き心地
三 只だ一筋の遠矢だに
二 光俊やがて唐寄乃
一 馬物の具の水はらせ

三 愛馬の立髪撫下のげ
二 如何に大鹿毛承はれ
一 水

五 哀別離苦の涙聲
四 光俊多年武勇の譽
三 斯る名馬は光俊が
二 いとく惜し心地
一 武勇勝れ主はどり

三 半は汝が勲川が
二 命と共に致さんは
一 天晴汝は長生へ
三 修羅の巻は走せ廻り
二 吾氏名をも後の世の
一 ヤヨ大鹿毛よ心得か
三 十王堂の柱につらぎ

三 流石は明智が馬なりと
二 武邊の語りに残せか
一 真心こめて言ひ聞かせ
三 おがて墨汁を取り出だ
二 一七

香の包みを推し開き

明智左馬介光俊

筆太々と書き残り

馬も名残り残惜みて

見返り勝ちに静々

心の中や如何なる人

五三の桐の世となれど

天正十年六月半

此馬を以て湖水を汲る者也

イザと汁の立ち去れば

声も哀れにいななく哉

改本城に引き揚げ

哀れ枯梗の花枯れ

この大鹿毛は秀吉に

日本一の名馬ぞと

君心濶け琵琶湖濶

舊主の名さへ武勇

朽ちせぬ譽れ今の世に

琵琶の湖琵琶の音に

傳へて語るが自出夜けれ

いと珍重に召されたり

清風番在唐崎松

花とたへて幾千代も

比良の山より猶高く

番めく語るが自出夜けれ

夜の鶴

玉蘭氏作

一 成る義の爲めに道は忘る
 二 例一我茲に姫少私
 三 遺愛の三人の児こ
 四 老母は其の爲め囚はれ
 五 嗚呼孝なえすれば慈なり
 六 寧ろ孝道の爲め自首
 七 水

一 道の爲めに義を忘る
 二 引くもゆかりの常磐若前
 三 大和に忍び居たり
 四 子びり折檻受るに聞
 五 慈ならんすれば孝なり
 六 三児を携へ出下にけり
 七 水

一 かくて老母は奮主なる
 二 妾幼児の愛にまよむ
 三 自ら故に罪もなす
 四 ぼるまかり上り候
 五 母の憂苦を救い給はれ
 六 いと哀れに聞えけり
 七 老母の孝道に感激
 八 水

一 九條の女院に渴申上げは
 二 今迄或る邊陲に流す
 三 老母の憂目は悲み
 四 我等親子を六波羅に送り
 五 誠を籠めし言葉の色
 六 されば女院を始め女官等も
 七 衣裳を調へ法車に載せ
 八 水

夜の鶴

二一

出^七て遠^ヤもやらるも

別^{夏上}れ古^ち葉^すも見^み納^もめ

後^中見^み送^くり入^いりかぬる

小^こ歌^かは更^{さら}に見^みえふ^時り

今^{いま}若^{わか}し若^{わか}に打^{うち}ちむかひ

ろかは搜^{さが}し出^いだされ

さるに依^{より}て今^{いま}より名^な乗^{のり}出^でん

共^{とも}に涙^{なみだ}にくれ羽^は馬^ば

折^しふり返^{かへ}り眺^{なが}むれが

人^{ひと}もなふけの村^{むら}時^{とき}雨^{あめ}

為^なる磐^{いわ}は漸^やく涙^{なみだ}收^とめ

身^み違^{ちが}は所^{ところ}詮^{せん}逃^にれぬ平^{へい}家^けの敵^{たかみ}

亡^なはれんは定^{さだ}めのこ

幼^{わらわ}少^なながらも大^{だい}将^{しやう}の子^こなれば

未^み練^{れん}の舉^あ動^{どう}給^{たま}ふは

美^み事^{こと}腹^{はら}切^きて見^みせ申^{まを}

さすが源^{げん}氏^しの後^{のち}胤^{すゑ}なり

つら思^{おも}ひ涙^{なみだ}控^{とど}め

母^{はは}もともぐ死^し出^で三^{さん}途^と

知^し死^し期^き待^{まち}つ間^まを

めぐりて早^{はや}は六^{ろく}波^は羅^らの

いはれて雨^{あめ}見^みは声^{こゑ}揃^{そろ}へ

臆^{おそ}する色^{いろ}も見^みえざれば

思^{おも}へば又^{また}も湧^わふ返^{かへ}

よも申^{まを}て給^{たま}はりよな

涙^{なみだ}も今^{いま}日^ひか明^あ日^ひか川^{がは}

うらや憂^{うれ}世^よは小^こ車^{ぐるま}の

館^{たね}に車^{くるま}つけさせ

三 取次の後伊勢守景綱に對ひ

四 老母を囚へ行方問は給ふ

五 自ら此迄参りたりと訴へける

六 老若は合若と若を尤右に坐す

七 願くば疾く者給はり

八 但一つの御願には

九 妾幼児を具く道水に

一〇 今日はその児を携へて

一〇 清盛頼て親子成見

一一 牛若成懐中に抱ださ

一二 老母は何の罪もな

一三 我等親子成成敗が終れ

一四 何卒妻を先に

一 松子等以後に殺す

二 他生の縁と聞く

三 深き先縁のゆる

四 深き妻が浅き

五 推量しや人々

六 むせび伏なる

七 色まじりたる景色

一 一樹の影一河の流れ

二 況して親となり子なり

三 卑怯ながらも隠れ

四 子や急に迷ふ夜の鶴

五 さらへ涙せよあ

六 老若の松も一

七 今若母成見上げ

夜の鶴

磯千鳥

二〇

二五

八番下

三 泣かで能く申させ給はる水

六 母上我は泣き候はずと

九 押さへし言へる言ひの三ト

六 又云あすべもなかり地が

三 白洲に立ちる白鷺も水地

中 木石ならぬ浮世の人

六 席にも得堪へずいり

五 小傍より乙若も水地

五 なみだ充溢港ゆる眼成

七 岩は益々咽せ返り

五 情の浪の打ち寄せ

上見ぬ鷲の清盛も

下 いかで涙のなかる屋も

四 すべりそらか影もな香

四 名のみは清き清盛も

六 老母も稚子も其人も

思はぬ方指す船も

又も種く白旗乃

五 折られて折れぬ葉なれ

四 終に岩磐の色香に愛も水地

四 釋す事にはなりに都鳥下

捨下採のたぢまちに

三 起因我茲に閑子一は水地

三 折られて折れぬ葉なれ

伏見の吹雪

玉蘭氏作

三平三
 頃^三は平治二年睦月の末^三一
 二^二袂の氷柱と^三ふ^三一^三らぬ^三
 三^三木の下^三闇に踏^三み迷^三い^三
 三^三若丸の手取^三取^三り^三迄^三
 三^三可^三行方^三は白雪^三及^三
 伏見^三に行^三暮^三れ給^三ひけり^三
 三^三春^三

喜^三め^三の^三なが^三ら^三河^三か^三へ^三河^三
 三^三岩^三前^三は^三若^三盤^三木^三の^三
 右^三に^三今^三若^三丸^三に^三は^三
 三^三乳^三房^三に^三す^三が^三る^三牛^三若^三を^三抱^三る^三
 三^三宿^三は^三ふ^三と^三も^三里^三の^三名^三は^三
 かく^三と^三坊^三子^三に^三は^三の^三見^三ゆ^三る^三

三^三煙^三火^三の^三影^三一^三た^三い^三寄^三り^三
 三^三幼^三者^三者^三召^三一^三具^三一^三
 三^三河^三は^三れ^三情^三に^三一^三夜^三の^三宿^三
 三^三平^三八^三九^三なる^三女^三房^三の^三
 三^三親^三子^三の^三人^三成^三熟^三々^三に^三打^三守^三
 三^三宿^三申^三た^三ら^三は^三候^三へ^三ども^三
 三^三源^三氏^三に^三中^三か^三り^三何^三る^三者^三一^三

三^三是^三は^三大^三和^三へ^三下^三る^三者^三なる^三が^三
 三^三雪^三に^三道^三ち^三ば^三失^三ふ^三今^三春^三
 三^三惠^三み^三給^三へ^三清^三い^三けれ^三ど^三
 三^三紙^三燭^三か^三げ^三を^三椽^三に^三出^三で^三
 三^三痛^三け^三の^三口^三有^三様^三や^三
 三^三此^三頃^三平^三家^三の^三沙^三汰^三じ^三い^三
 三^三堅^三く^三冷^三瀝^三の^三何^三る^三一^三
 三^三早^三

其御姿にて涙り候は

自らは白砂と申し

源氏譜代の者おれども

弥平兵衛宗清が妻にぞいふ

歯牙の為に悪かりなむ

疾り落延び給へがむ

雪の磐の松に白砂の

答められむは必定なり

比企藤九郎盛長が妹

今は故ありて平家の侍

今にも良人の帰りをば

情なき様には侍れども

云ふもゆかき深みど

雪より情さらるるぞ

積るめぐみと知られけり

いそも生死はわか給ども

菅の小笠城屏風と

母子四人のハツの袖

間なく降来る泡雪の

若くは前には痛けりや

苦しみ悶へ伏し給

尤れば途方も今は只羽馬

祢ぐらをあらは定めん

身はならはけの軒の蔭

信敷ながら外にけるが

消えて肌は必み泣く

終に寒き手に被はれ

今若くは若き若き

五 喃悲しやな如何にせむ金

四 おのが少袖袂脱ぎ取り

五 共々いたばるし母ら十五

五 少さき衣袂はぎ退け

五 寒は堪ゆるぢら十三

四 かる有様見る十九

五 百萬餘騎の大將軍と

四 顔袂押へ手袂さすり

三 母の上へと打重糸

六 兄袂見真似の牛若丸

五 同ト様にも母に着せ

四 老懸は漸に眼を弄金

四 嗚呼情は浅間金

六 仰がる厚心若達金

四 一重の衣袂着せぬるは

四 可愛の者よは身達が

五 母は着すとも暖かな

三 膝に捲ふ寄せ抱ふ水

五 折も何れや彌平宗清ハ

四 我家の軒の人影袂

四 老懸と母子に給れが

四 如何なる神の咎め十六

三 厚心は綾錦

三 此方へ寄れと三人袂

五 雪踏分け足歸り来五

四 何者なるかとも見れば

四 揃め揃らむを思ひが

三 窮鳥懐中に入る時は
 四 今此母子の羽拔馬
 四 情知らぬは武士なまず
 六 心成かためて宗清が
 中 音に白砂出下速へ
 三 梢あり宗清女房に折向ひ
 四 雀のさわぐ声あする

四 獵人すらも捕守に春
 捕らも平家に何ぞ金
 四 知らぬさまも過さん
 秋 茶の戸ぼり球打叩ん
 徐に誘ひ入れにする人
 四 今宵は殊に軒の端に
 三 なごて今まを追はるるか

言へどそれとも白砂は
 夜なく暮る軒雀
 三 宗清弓矢押取
 五 箒籠籠の紋跡
 追はる叶はぬ宗清が
 切一放ち鳴かぶら
 五 乳房索のほろ給ふ十九年

一 ぬさまはも装ひつ
 見通か給へ言ひけれ
 牛にゆかりの子雀は
 づらるか如何に知らね共
 心の減受けをよと
 七 響音の響る牛若丸

伏見の吹雪

雪瀑笠搥風卷袂

他年鉄拐峯頭吟

診方なほねら出

潜める龍の雲を起

石を中天にあげけるも

知らぬ者さうなかららん

吼々索乳若為情

叱咤三軍是此声

龍門の里に志す潜みけり

雨を致えん時攻得て

岩を中あたげけるも

知らぬ者さうなかららん

佐波の若竹

叔父も日野中納言資朝ハ

北條高時攻珠芝と謀り

佐波が島に流され

糧なく亡ぼるべきの由

茲に資朝の子阿新丸を

佐波の悲報に心消之

後醍醐帝の密勅を奉

中道に事頭はれ

本間山城入道の為め

仄かに都へ聞之けり

青年甫めて十三才

生前父に渴へ波に

漸く母の許容を得て
遙々修波へ心ざし
島に浮寝の父君に
生理の道の遠けれど
菅の小笠城傾希
赤がれてし之越路の旅
斯く教賀出汐や

老僕一人召具わ
都をあらは出下りけり
一日も早く大江山
踏みもなわぬ草鞋に
行方も知らぬ由良の戸成
想ひゆるころ哀れなれ
真帆に吹風の帯も早船

君に相川北の海
難なく修波へ着給へり
具に事情申しければ
父子對面の事のみは
然るに資朝は我子の尋ね来由
速かに對面せられ夜に
入道遂に許されば

水支の松手も面白く
やがて阿新木間が館に訪問
入道不憫と思ひ一が
関東の尊えも如何と更に許す
夢かきばかりよりあむ
様々なげふ聞し
叔下も情なき事哉

知らぬ昨日はも角山
一ツ島根に在りながら
さすおに猛る資朝も
時は元弘元亨五月元亨
資朝郷を牢屋より半
阿新狂おれ走せ出る哉
嗚呼悲おな如何にせん
十一早下

今日に我子のたれ来
相見事も叶はずやと
不覺の涙に暮れにけり
今も木間三郎と云ふ者
害奉る由聞えければ
警固の武士に遠ざられ
憂目つら目忍びつゝ

漸くおへ涙り来て
都にこそ母上に
心へ悲しむおからに
阿新取り抱き婦め
変るなふから我母も悲し
心の中の本意なす哉
去る程に阿新死なす存有

今際のよわに逢はれせず
何の面目もあらずやと
父の遺骨を送られければ
哀れ今生の對面叶はず
身成顛はせて泣く沈む
思ふやだに遺憾な三
父の遺骨は夫僕に持ち帰ら

信濃の老母

四一

己は芳はる由申し
晝は終日臥暮
可憐なるは入道に
其機會は窺ひが
是は幸ひと阿新丸
夜更に粗い寄りたるが
唯一人臥たりければ

尚も本間が館に番
夜はいろやかな忍び出で
遺恨の太刀融るんと
或る夜天の恵を列打雨風
扱ふ足指一足入道の
父は斬りたる本間三郎
是も時最を父の敵

撃つて日頃の遺恨晴すと
身に寸鉄を帯びれば
如何はせと案上煩悩は
是は屈竟と肯う、
蛾は忽ち飛び入る
任令よりと探り寄り
寝ねたる人は死人に等

心は矢竹に逸れども
他人の得物に頼むのみ
障子に群る燈蛾
障子を必し割られど
燈火は火打消し
刀は集む扱ふはな
い下驚か呉火す

枕を父と蹴り退れば
五 戸と肩先斬り下
三 いろむ所は跡け入り
四 静に竹叢にかくれたり
四 周章狼狽出下河
四 正に阿新の跡為と知れば
手は松明振りかぶり

三郎驚き起るとす
返す刀に利腕はらぐと
喉笛グサト突通
此物音に急ぎの面々
血汐に凍や足跡に
探し出で打ち取れと
木蔭草蔭探しは

五 危かうける次第なり
三 難を廻らす垢漬
四 斯くやみ撃たんより
三 死は易く生は難
五 垢のほろに指靡く
其下 不思議は竹は漸次に傾
稚子をば渡すは

此の時阿新キト思お探
遁れ出アテ途も
自害なふんじなり
如何にもく逃して
竹にス入りは禁帯
彼方の岸に易
魔は渡し若竹に

作波の若竹

心こころのなげのたわみたわみが下した

幾いく千せん代だいかけを此こゝ君きみの

譽ほまれは毒どくを遺のこりけり

佛ほとけは前まへ

玉蘭氏作

一いち平へい相そう國こく法ほふ威ゐの

佛ほとけは前まへと名な以も呼よばれ

徳とくい初はつむる櫻さくらよわ

毒どくに稱なづ揚やうを白しろ松しょう子この

いまだ太た上じやう入にゅう道どうに

イテ今け日ふは館くわんに推す系けいは

佛ほとけは前まへ

心こころのなげのたわみたわみが下した

幾いく千せん代だいかけを此こゝ君きみの

譽ほまれは毒どくを遺のこりけり

三さん驕けう奢しゃ者者暴ぼう慢まんを極ごくめ次つぎ次つぎ

一いち年ねんは二に八はちの稱なづ生せいの空くう

一いち層そう勝しょうる姿すがた色いろ不ふと

一いち日にちいりかに思おもふやう

三さん聘へいされぶるあり遺のこ憾がんを

六ろく道どう般ぱんにまみえんと

田六

四 やがて西八條の館に至り
 四 折節一門の人々寄り集い
 三 清盛耳を大に怒り
 一 自ら進みて来るあり
 四 疾進返せと宣いたり
 五 夫は情なきは後哉と
 三 遂に口聞入らふれば

三 一の由新と申入けるに
 四 酒酌み文おけしが
 六 賤しき身おも顧みず
 四 典禮至極の痴者なれ
 七 佛は前は作せを聞さ
 三 種々歎き申ししも
 六 是非もなき恥を忍び

一 たり情然と退出けり
 四 祇王と云ふ美人傍より
 七 戎身も同し流杯酌みつれど
 五 殊に妻の好色に舌置るも
 三 情なき帰し給いなば
 二 いと愧し三つ候へ
 五 ありなご口現し申ければ

四 此酌入道の寵愛淡がさる
 四 清盛に継りて申しけるは
 六 他人の憂愁の量り知る
 三 佛も知りて侍らる心
 三 妻の嫉妬と想はれんか
 七 あはれ一夜百給へか
 一 秋上 すが我慢の清盛も

中 祇王の汁をなればこそ

佛の前は味び入れ下

今様をが淫けしむ今様

君を初め見り時

千代も短く娘少松

西前の池なる花か周

橋より群居て遊ぶ

斯くお返し

二夜三夜淫ひけれ

入道卒に興に以

さるも声の美し

いざ舞は番舞の候へ

左右は鼓を打せ待居たり

佛の前は向ふか

髪高々と結び上げ

舞能續へる水干に

白き袴は着けたるは

雲井成翔る芦田鶴の

天女は脊負小姿とも

和仰がれて衣と目切夜や

少松彩色る扇は揚げ

節泳の声果に澄波り

初子の例し今日此に

誰か引くらも舞の袖

願くは萩の枝ならん

我がい散らふ秋の波

たゞよふおとに望人

仲小折

五一

一 漢まうてあり居たりしが

二 祇王を排け佛の手取り

三 佛の前はなごろまけし

四 祇王は前の情に仍り

五 平不でさる事のあらるべし

六 身成退か沈びぬれど

七 汝祇王を憚るにや

一 情盛春恋の情業得ず

二 強く傍に侍らむれば

三 是は現ならぬ事かな

四 古目にも懸る事にて候へ

五 免させ給へと只後に

六 入道更に汗し給はず

七 さらば渠は逐むのみと

一 佛は前の泣き悲しき

二 遂に祇王成退か

三 人に情けは身の仇と

四 假令一樹の蔭に在り

五 別れはあやと悲し

六 馴れど宿成りかにせむ

七 泣かどとるも止め得ぬ

一 切りに凍止あるも肯が

二 さらば祇王は前

三 振り変るる哀さよ

四 一河の流れは波おとすも

五 況や三年の星霜に

六 去らんとしは躊躇ひ

七 涙は袖にむらりぬれ

紅葉にのりぬ華深の春

前出るも枯るもあが野邊の草

三 いづれか秋にのりぬ果つる草

五 斯なむ紀念に書は遺し打萎れつ出下にけ外

三 打萎れつ出下にけ外

三 泉の三郎

玉蘭氏作

三 軼越に敵營攻跡猶し

檀の浦に平家を殄滅し

三 赫々たる武勳世に比有なく

三 軍神と賞揚されたる

三 九郎判官義経も

蝸牛の双角のいさかむら

三 止むなく都を出汝や

三 みちの奥なる秀衡に

三 信憑る事はなりには

三 爰に秀衡の三男にて

三 泉の三郎忠衛も

三 天資豪邁義経に

忠孝無二の勇士なれば

固く其遺言を打守り

去程頼朝未衛の病歿以耳

義經を討がんと謀り

遂に其甘言に誘惑され

思ひ起すが淺間川春

まだ消え残る雪かとも

父未衛が逝去の後

義經に厚く仕へ奉りたり

屢密使を奥州に下

忠衛の長兄泰衛は

去就決断に決せんと

頃長治五年四月中旬

まかふ汗りの外の花

瓊根めくら守紫の衣に

密議に首は鳩めり鳥

今日の事唯父遺命に従

群色激し言いつれ共

忠衛大に嘆歎し

三寶の加護なしと

彼に害は加へむ如し

五人の同胞寄り集り

猶も忠衛は泰衛等と討

亦何れか激しめしか

輒く容らざるも刃ぶれば

呼喚六親不和い

況ん先考の遺命に背

不孝不義に與せんは

吾等が決て為能はざる討

たのが北城の平泉に

斬く残る四人の兄弟は

先づ忠衛を討ち義經に及ぼ

平泉城に押寄せたり

忠衛如何に豪勇なるも

味方逐次に討死

はわら暇賜り申さん

帰りにわらう勇一

頼朝に従ふ俄に決

俄に三千餘騎を催

素より末意の襲撃は

象寡の勢敵一難

残兵僅か二十餘

介や最後と見えたりけり

栗毛の駒に打騎と

面次はいろ羅刀成

是が三郎が妻なりけり

介一夜介生るん

やうやく一方切り弁

先立つものは恩愛の

がる此に搦手あり

みどりの髪はより亂

尤手にかい込み馳せ来

良人の馬前に駒を踏

郎君とわしに會は

未憐ながらも通川

莫情は汝は村時雨

我衣の袖に降りかゝる十四年下
 断腸の涙に咽び一が
 卿は忠信が妹一は
 疾りく落ちもと勸むれば
 今際に至りかねる水作せ
 今諸共死せよと云は宣はず三

流石に猛り忠衛も六
 今是非なりさりとて
 恩おにたより向らぬ九べし
 妻はるれと聞も向へず水
 軍も却と恨め水や
 至誠浴肝忠衛情

○ 文史及雜烈婦志

さらば共々討死せむ
 あの和子満すも心苦十九年下
 後母の迷妾は晴さへ水
 殺さるゝとも一ら霧が水
 情もむ状の愛り始
 姑一たあらし時と河れ
 前早お澄方なりも

志かは河れ共頑是な心
 寧ろ吾等が手に掛け
 寝后ふみとら子抱上水に
 名残の雨に眼が覺水
 いかで又の當らら又十五
 敵兵間近く寄せられ水
 震小腕に力攻籠水地

六 ぐサと許りに刺し殺す

三 無惨と云も愚かなり

五 重田破り修構無盡

八 城に歸りし火塔放ち

六 今も昔の跡訪へば

中 盡きぬ泉の三郎が

五 酒此む後も北上の

五 親の心や如何ならむ

四 やがて忠衛妻渚

六 敵攻四方に難が散

一 刺文へて少おほ死

三 袖に涙も湧る出

下 むすぶ妹眷の子に氷

三 流れと共に末がけ

五 喜史に美名残雷のけり

三 喜史に美名残雷のけり

小楠公

外國氏作

二 寔に定めなきの浮世習

二 下に盗路の逆賊多く

三 向れ霧びたる北風に

三 何時解くやも元

三 上に竟舜の君は在はせど

三 真正平は名のみを

四 吹さ亂だされ麻糸の

二 儲も逆臣尊氏が執事

五 武蔵守高の沙直

六 四國中國東山東海

四 奥高十方戎引率

三 既に都を叢足

鹿島神崎櫻井水無瀬

六 今にも寄まぶ見

四 楠河内守止行

四 越後守同苗師春の文は

五 四百三十六大名の軍兵

四 吉野戎一舉に攻んずと

八幡山崎真木葛葉

數ヶ所に直る陣を布き

四 南朝方の總大将

早くも味方の軍潰を定め

頃には沙走の末の方

五 雲別け登る山の奥

明日から待た下消えてゆく

其時四條中納言

三 父正成冠弱の身は以て

五 先帝の宸襟は休め糸を

尊氏西國より攻より

六 天下再び打亂

四 逆賊北條を討滅

隆資御をく奏す

三 建業の覺悟は

五 岩間に結ぶ落氷の

六 雪や霰の昨日今日

三 吉野の皇族は

三 湊川に於て我死し果てぬ
六 合戦の場へは伴なを
三 死跡にる郎党は扱拍
八 重忠遺訓を候に
四 待事あるの身成以て
五 上は不忠の臣とならん
六 此及浦直海泰の兄弟

七 正行當年十三歳
五 河内へ歸し候に
二 時節は侍朝敵を亡せ
三 老少不定は人生の常
四 早世仕る事も河らば
二 下は不孝の子とならん
六 十萬の大軍に將を

一 押寄せ来らん事のよし
三 首我取るか授らるか
四 されば今生の仇を
三 揮喝の業は賜り
五 是を此母の御別
四 声は何時か顛はれん
一 落し碎らる大丈夫の

三 具さる身之候より
二 雄雄を決すの時
四 畏れられ候に
三 出陣仕り候はば
七 如何に娘の小候へ
中 草摺を打て玉
心 心の奥を推しはかり

五 隆資卿も御涙に

四 されば即時にその由致

三 最惜の者も畏れ

二 龍類殊に秦

一 敵の軍勢は極

四 累代の忠節又子の武功

三 今や大敵目前に迫り

五 斯れば今夜の合戦

四 總して我場の駆引は

三 進むべき我知を進み

二 退くべき我知を退き

一 朕汝を以て股肱と頼めり

三 命は命を以て

六 勿體なきと畏るるに

三 袖を絞み給ひ

四 主上に傳奏され

三 南殿の御座に

四 ヤヨ正行西度の我に

五 先づ憤り慰する

三 神妙にあり思ほ

三 勢い猖獗は極

六 則ち天下の安危

五 一に武將の隨意

三 時分失はざる

二 後我命を以て

三 進退共に宜し

五 以て命を以て

五 正行顔を地に埋

三 兎角の勅巻にも及び得ず

四 泣く音残忍ぶ計りなり群千鳥

四 士卒の端に至るもまぐ

二 玉座残立を給ひ十九日

五 眞殿深し御姿の

三 やかしく皇室告退は

五 室さへ泣くか降る雪十五日下

五 唯感涙は咽ひ七〇

四 至上は涙珠拭き給金

四 隈なく石見せられ金

七 是は一期の命残り金

三 見えさせ給ふを三挿金

四 天色彌々暗く金

旭 樹木の梢は花盛り金

色さへ香さへ散り中

矢竹心の文字のみは

四 條霞の定は三

茶之湯が目出夜三

奥き數に入る様中

千代萬代も限り三

茶之湯が目出夜五

勸進帳

二 将功なり萬骨枯れ

校兎ついで良狗煮る五

三 千軍萬馬馳騁し

三 彼の抗原が澆に會ひ

四 源清は白旗の

六 去程に九郎判官兼經は

四 伊勢の三郎辰河の次郎

三 主從僅か十二人

五 心細くも落ち給ふ

六 露けり袖や絞る

三 限りもさやふ雪の

五 十日あまりの宵月

七 行くも歸るも別れは

五 笑をへたる朝がすみ

中 海津の浦に着り頃

七 浅茅色づく若乳山

三 伴勤茂樹し其の人

三 世の浪風に漂浪い

四 流れの末を果敢なれ

五 武花坊辨慶茂始め

四 信岡増尾光隆坊

三 山伏姿に俏しつ

七 袂の衣は條懸り

五 行年ほるけき陸奥の

三 まだ消えやぬ如月の

六 月の都を出た

六 知るも知らぬも逢坂の

旭 浪路はるかたは

一 東雲早く明ければ

六 帯比の女若神垣に

五 松のみどりの木のめ山

河瀬の水の浅沙水の

芒の篠原浪寄せし

花の安宅に着にけり

義経の落ちぬを尋ね

いと厳重に固めたり

際も頼朝宿願を成し

七四 仙人山のいたとりや

末は三國の湊なむ

靡く山嵐の烈しき

去る程に頼朝公も

俄に國々に關が設け

斯う主従は此の新關に掛り

りれと見らる油断なく

四 煮高らかに呼び止めつ

六 中不和と成るを治し

四 頼みたまふ為免

三 下向の由聞ふ及ぶ

五 夢二歩だも通さぬ様

四 いと厳かに申しけり

四 弁慶あどろく景色が

七 此夜頼朝義経の兄弟

五 判官は陸奥の赤衝を

山伏の姿によりけり

六 凡そ山伏のとはがらは

五 鎌倉夜の山沙汰なり

三 豫て期たす事なれど

四 おさらば落付拂ひ答ふ

三六 作つくり山やま伏ふしの上うへにをのりえ

北きた陸りくのを勅しやく進しん表へい承じやうり

三三 此こゝ所ところをし関せき止とめ給はま事こと

熊くま野の権ごん現げんのを眞ま罰ばつ

三二 活いれば富とみ樞しゆはち止とめす

辨べん慶けい父ふと申はつまり

一いつ期きのを大だい事じと軍速すく急きふ轉てん

三七 是こゝはな南なん都と東とう大だい寺じ建けん立たのため

四よ能より通る者は候へば

四よ明めい王わうのを照せう見けん計けいの難く

三さん立た所ところにつたるべし

三さん允いんは勅進しん帳ちやうを遊ばれと申す

如何いかはせと騎たらば

及およびしめたる軍ぐん書しよの一卷まき

五ご勅しやく進しん帳ちやうと名付なづけらる

四よ前まへ後ご左さ右みぎに等分ぶん配はいり

五ご秋あき子こ吼うのを声こゑ張はり上あげし

四よ支しれ熟々じやく惟ただみれお

四よ涅ね槃ぱんのを雲うみにかくれ

一いつ驚おどろかすべし人ひともならず

四よ澄すみみも無なく淡上あげらる

勅進帳

四よ敬けい々じやくに押し載せらる

四よ惣そう身みのを力ちから張はりり絞り絞り

六む大だい恩おん教きやう主しゆのを秋あきのを月つきは

五ご生せい死し長ちやう夜やのを長ちやう夢ゆめ

三さん富とみ樞しゆのを命いのちは身傾かたむけ居る

三さん富とみ樞しゆのを命いのちは身傾かたむけ居る

七六

三 心にふところ事有りけん
 四 難なく開成系十三春
 後れながらに辿りよー
 只人なまずと河かれは
 一 腹立たしげに声何らげ
 四 行く先は急と旅なると
 三 連れにはぐれて怪まれ

四 一人思業の胸は定め七八
 三 されど強力に装ひて
 四 義經の威容自然に現れ
 五 スワ一大事と并慶は
 五 今日には能登の國を看は
 四 僅かの及に疲れ果て
 四 時成移すは不届なり二下

目に見物見せんと立寄ら
 六 金剛杖の雨何られ
 心の中や如何なるも
 神より知らるるすくんと
 三 無念をもよのぶ并慶の
 漸くに一閑守の疑いけ
 耳も一同胸換下三春

義經の襟髪取て引拵へ
 打たる身より打つ人の
 三 主に鞭打つ悪逆無道
 心の中に合掌一
 五 赤ら減致有難ぶ十三
 四 さらば忠通りあるべし
 虎の尾踏む心地

龍の喉をのがれつゝ
 嗚呼痛まじやも
 島島の浦の魚も
 下つれば変る様衣
 嗚呼并後の孤忠あり
 名も延年の舞の手
 永く譽れ我傳へけり

陸奥さへ落ち落ふ
 軻越の凱歌も
 哀れ取果く消之失
 刃の榮枯は是非も
 武士はらが滅心は
 永く譽れ我傳へけり

義民の龜鑑

一 収飲の臣向らんとり
 二 暴君若汚吏我戒むら
 三 私慾に沈み民我虚げ
 四 輩の跡我純へぶるは
 五 茲に下總佐右の領を
 六 奸佞邪臣蔓りて

一 寧ろ盗臣向らんとり
 二 古人の訓は向るもの我
 三 不義の富貴我希ふ
 四 介トは惜しむ次第あり
 五 堀田加賀守に盛の領地
 六 重り年貢に堪へば

三 平情の郡公は村の名を
 義侠に勇む性なれば
 三 民の望みは故は
 四 承應三年霜月中旬
 六 斯く折返窺少程に
 極月廿日景敵山寛永寺に
 天にも昇る心地
 八 木内宗五郎
 加役は免れ願ひ出で
 身は捨て家は願はず
 江戸は指し上りける
 天の恵や巡り来り
 將軍は多事消あり
 一日子秋と待受け
 三 春

一 聽く其の目となりければ
 五 宗五は折状は懐に
 今や逢と待掛たり
 鐘は奥寺に告げ渡る
 半ばは冥土に響く鳥
 時の將軍家綱公
 静々成らせ賜はける
 十一 春

六 未明に支度を整へ
 三 橋の下に潜みつゝ
 上野に響く明六の
 是れ生死の別は跡や
 程なく時刻移り来て
 前驅後従も敵かに
 此處より宗五は駆け下
 八 五

戦氏の流

八五

佐倉の領民を願向り
乗物近く進み寄る
數多の供人押合け
神色自若恣々
張浩等も撓みつ
國の控に任せん
狗の纏れは解け

直沂奉ると呼ぶ
スハ狼藉も立騒
必死致期せ宗五郎
難なく沂状を揚げ
望み叶い上からは
自らから無蟹の
身は縛の萬がら

屠所の羊の是非なき
此世の縁も浅草や
川は三途の流れかも
身のは末は市川の
夢跡を辿る情も
身に代る身の覚悟
去程に領主加賀守は

國元指て送らる
此處は各に負ふ兩國の
千住行徳早退
流に任かす船橋や
二百二十九ヶ村及
いと頼母と人心かな
政事怠慢の廉により

四 閻魔の職裁割がれ

三 罪惡茲に極り

二 浮浪の身ながらにナリ

一 夜枯れ一民草も

怨嗟の声の跡もなく

されど情若宗五郎

時の有司の憎みにより

四 奸臣二十七名の

重きは死罪輕は文

茲に一陽未福一

惠の露に露ひいし

母は太平に歸りけり

國法犯せ罪科と

女房み祢成始めと

七 未だいたひける幼子の

三 刑場さくを突れけり

六 老の声は鳴る神の

三 神も怒ると覺ゆなり

四 數多の人に打向ひ

三 捨て果し身を何處

六 民の榮へを祈るが地

五 四人の男子諸共に

七 天に悲み地に呼ぶ

四 車轉く如く天地乃

三 宗吾支婦は惡むす

五 我等親子は始めより

四 幾百年の後迄も

六 雄々しくも又健氣なる

言葉に籠る無量の思ひ

寝て坐に着く辺を見廻

心静かに辞世をぞ吟どける 上人者上

梅散る梢を蓮の臺哉

声に應トて女房も全ナ

今日諸共に消る泡雪

互に顔を見合せつ

莞爾と笑ひ言葉なく

朝の霧と消へにけり

可愛の稚子の平城

死出の山路を辿るえ

豹は死して皮は番の

刀は死して名は残す

義民の鑑と作られた

宗吾明神と崇められ

誉は幾代の後までも

佐倉の城下に薫るらむ

佐倉の城下に薫るらむ

隅田川

残す甲斐なるはむなしく ありに甲斐なきはむなしく

見への隠しつ面影の
 人間憂の花盛り
 生死長夜の月の影
 実に目の前の浮世の
 花子の前はいとよしの
 茲に月日改故郷の
 東の道の管の根や

定めなき世のならい
 奥の嵐音ろそ
 不定の雲の立ち迷ふ
 借も言田の將維貞が思ひ妻
 梅若丸に別れをより
 都がづふと立ち出下
 長は旅寐成重わつん

三 跡遠山に越えなげ
 中 言問は見都馬
 七 梨の礫のろれなげ
 八 淋く涙を入相の
 九 風とよもなむ夕暮の
 四 寂滅為樂は是れ
 四 許多の人我望み
 五 茲が名にあふ隅田川
 中 我思ふ子は今の
 五 卷ふるものは波の上
 中 瀧の響にさるわけて
 七 室にさぼる花の雪
 四 折りも彼方に集ふなる
 四 喃々波守に物申さ

隅田川

四 彼れなる人々打むれて
 三 尋ね給へば渡守
 四 去年の三月十五相
 三 年は十二か十三の
 三 此處迄下り候が
 五 病起り歩さ得ず
 二 棄つて人たり去りぬ

四 何をかいつてあはす
 四 能くさう問はせ給はれ
 五 人商人の都より
 二 由緒ある公達
 七 習はぬ旅の芳れにや
 三 惱ませ給ふ商人は
 七 後にて我等

五 看護に心づかせ
 三 病つりのいし
 四 以身は何處如何なる人
 五 必ず傳へまぬせ
 七 声もかすかに我ら
 四 吉田少将維貞が
 六 父にかくれ母の手

陽田川

五 其甲斐之なるか
 三 既に末期に見え
 四 言ひ遺す事わらば
 四 問へばツまわの目
 四 都北白川のほら
 四 梅若丸と呼つる
 六 是迄成長なげ

七二

四 人商人に捕はれて

五 都の人の影だにも

六 此道の辺に築込の

七 柳を植えてたまわれ

八 遂にあとざれ終いぬと

九 其れは真か浅間

十 野に臥し山に明か

四 新様に成り候は

五 いとながかく候へ

六 せめては後の記念

七 云らる念佛の声哀

八 耳と驚く花子の前

九 妾は梅若丸が母

十 遙けき道哉東ま

三 何かが来りも今

四 思へば去年の力

五 道のほろりの土

六 この下にあり何

七 集ふる人も何

八 それど今はた

九 甲斐な事も事

二 無事なる姿見

三 生所哉さうと東

四 毒の草の生茂

五 物狂りて後

六 袖はらぬはな

七 此歎も候い

八 せめて忌日に

五 盡すぬ縁の河れば八景下

三 さう慌び給はめ水地

七 歎ふも止む声澄や

四 心は西にし一す二金に

三 我子以救は給へ水地天

一 共に聞ゆる我子の声水地天

中 見ゆる姿は去年のま

三 母市の吊ひ給ひ水地

六 孤鼓を以手水地

二 月之夜念佛法共水地

二 南無や西方極樂世界

一 打鳴たる鉦の音水地

一 塚の彼方朦朧と

一 髪は見婦の振りの袖水地

二 儲は梅若なるか水地

一 糸に纏る水地

一 消え後なる理水地

一 ほろに今も残りけ水地

一 纏り給へば喜柳水地

一 早瀬に浮ぶたがた水地

一 示一顔なる隅田水地

一 ほろに今も残りけ水地

吉野静

玉蘭氏作

乙 叔も文治元年霜月の

なかの六日の事水地

ちんりはけお静しずかは前まへ一
吉野きちのへ来きも来き給たまひが
憂うれ身のたのし示しすか也
ぶいげ一財さいが玉たまの緒おを
地に連理れんりの枝えだ何なにる也
たれにも何なにか方かたる屋やの
従したがいまれば我われ君きみの

君きみのちん跡あとたいつ一
峯たかねにわかろ浮雲うきぐもは
ちもふえそ一初はつより
天あまに比翼ひよくの鳥とり何なにる也
君きみと交まじせ一睡言すいごんは
さへ去さりなから此儘このままに
煩わづらいのよりささされて

各各自残惜ざんしやくめど是非是非もな
かたみの思おもひます鏡かがみ
打抱うたとつ、泣なは終はつふ
義ぎ致ぢも忘わすれり利りに迷まよひ
あらぬなぐみ我われ押包おしづみ
枯木こぼの下したに皮かわ我われ敷しふ
我われ等ら麓ふもとに下くだりゆきて

別わかれと今いまはあさらめ
何なにら喜よろこぶ日ひこいさ小鼓こづかを
去程さつじやうに心財しんさい一供人きゆうじんは
寶たからをうばひ逃のがれんと
静しずかは前まへをいたはわつ
こゝにて暫しば一待まちちたま
今宵こんやの宿やどを尋たずね乞こひ

四 やがて迎へ奉らん

七 すまに此日もれ羽鳥

三 供人いかにせしなり

七 いと怪しきは思へども

三 今しばし待て間に

五 雪さへ痛し降りし

四 あらなむけなや供人は

四 かのく麓に下りけり

六 ねむら索めに下るし

四 待どゆん歸り来ず

五 尋ねん由もあらぶれど

二 夜は遙々と更けや

三 身も埋もれん許り

四 判官坂のたじ給いし

三 寶に眼くらみけむ

七 情けれども冷すべし

三 是に任せやまをけり

中 月は梢に影さし

七 雪は鷺毛に似し

上 人は鶴毫に被し

三 されば今降る雪は

五 我れ歎き捨てける

五 なりて枯木の木立

秋 朽も出づるさよ

千々に物さる悲し

六 飛んて散亂し

六 立て徘徊す

二 都にありとも

去年身雪に斐らぬど
 袖は涙に凍りぬれ
 穿たる靴は雪に破られ
 血汐は峯のーら雪哉
 悲しむ人はぞらりと
 叫べと谷はあらり吹く
 中 ひとりの外は谷川乃

五 袖はつららに綴られ
 五 さらなる笠は風に吹
 三 足踏み損とれぬの
 二 りめぬ跡もなかりけ
 上 覚束なくも叫子鳥
 春 杉のうら枝の雪枝の
 二 さやく如き水の音

耳につらさを憎りける人
 三 山路に迷い泣くあか
 声より先にたどり出で
 雪踏み分け痕は見え
 暮いでゆけば悲しやな
 下 下より葉も絶えにけり
 けふ十七日の暮までも

四 斯く其夜はよもすがら
 五 志のめ告ぐる群鳥の
 上 峯にのぼる谷にくだり
 二 君のふん跡なかりかと
 中 吹き巻く雪に掩消れ
 六 志のふの晝に君に別れ
 三 静は前は唯ひとり

三
吉野の山にまよふ人が
たどり出させ給いけ
五
おらおらといふ大道に
たどり出させ給いけ

大正三年十二月一日印刷
全年全月六日發行

定價金參拾錢

作曲水也田旭嶺

發行兼印刷者 前田梅吉
大阪市東區南渡邊町八番地

禁轉載

發行所

前田文進堂

電東四九九八
振替段一二四七二

東京市神田區表神保町十番地
巖山堂書店

既刊春の巻目次

君の代 敦盛段上
 敦盛段下 山城山
 小督局 備後三郎
 錦の御旗段上 錦の御旗段下
 赤垣源藏 月照
 常陸丸 備後三郎
 平野次郎 白虎隊
 廣瀬中佐 蕾の花
 曾我 木村長門守
 勾當内侍 以上

既刊夏の巻目次

春日野 臺灣入
 河内の宿 松の廊下
 扇の的 石童丸
 太田道灌 四條暇
 竹林只七 叢雲
 宇治川段上 宇治川段下
 湊川 梅若丸
 海洋島 静御前
 以上

近刊冬の巻目次

大島源吾 高田の馬場
 櫻井の驛 南部坂
 橘中佐 以上
 伴賀の曙
 菅公
 護良親王
 義士の木懐
 靈馬の漣
 菊水

琵琶の起源と作者

琵琶は其昔印度に生れ、支那に傳はり而して日本に渡
 來せしものにして、平家琵琶滅亡後曲節野卑に流れ座
 頭琵琶に崩れしを旭翁橋智定氏多年苦心の結果茲に完
 全なる筑前琵琶が出来たのである、歌の作者としては
 工學士玉蘭達邑容吉氏が敦盛海洋島等を始めとして苦
 心に苦心を重ねられ今日に至つたのである、橋旭翁氏
 達邑玉蘭氏の功勞や實に偉大なるもので有る、尙九州
 には今村外園、南部露庵氏等の作者が有る。

一、琵琶は歌ふものにあらずして談^{カク}るものであるから一言一句文章の意
 味をよく理解して歌中の人と成り演奏すべし。
 一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春
 日花に對するが如く、夏節は強音にして森嚴なること初夏新緑發生の
 感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば露夜明月を眺むるが如く、
 冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊
 來の筑紫節にして最と婀娜なる調子なり、旭節は右と正反對の調子に
 して詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬
 は四より起ると心得べし。
 一、初學者は琵琶の合の手（彈法）と歌と連絡調和せぬものだが此合の
 手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に
 彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

◎習得者の心得

一、琵琶は歌ふものにあらずして談^{カク}るものであるから一言一句文章の意
 味をよく理解して歌中の人と成り演奏すべし。
 一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春
 日花に對するが如く、夏節は強音にして森嚴なること初夏新緑發生の
 感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば露夜明月を眺むるが如く、
 冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊
 來の筑紫節にして最と婀娜なる調子なり、旭節は右と正反對の調子に
 して詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬
 は四より起ると心得べし。
 一、初學者は琵琶の合の手（彈法）と歌と連絡調和せぬものだが此合の
 手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に
 彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

の手も弾き法が悪ると少しも悲哀には聞へない、折角一生懸命に歌つて悲哀を表して居ても合手の弾き法が悪ると爲めに歌を殺してしまふから弾法をおろそかにしてはいかぬ、悲哀の手は悲哀に勇壯の手は勇壯に弾かれればいけない、即ち弾法の功拙は歌の生死に關するものである。

一、琵琶の習得法—初學者は初めから難づかしい歌曲を習ひたがるものだが小學校生徒が大學校の學科を習つて解る筈が無いのと同じ事で段々と初傳、中傳、奥傳、皆傳と階段を踏んで行かればいけない、又一つの歌曲を一日でも早く揚げて數ばかり進みたがる人があるが大變にいかぬ事で一曲がよく腹へ入つてしまへば次に習得すべき歌曲は容易に解る事が出来る、然るにどの曲もく／＼荒覚えにして置くと前のから前のから忘れてしまふからよく注意すべき事である。

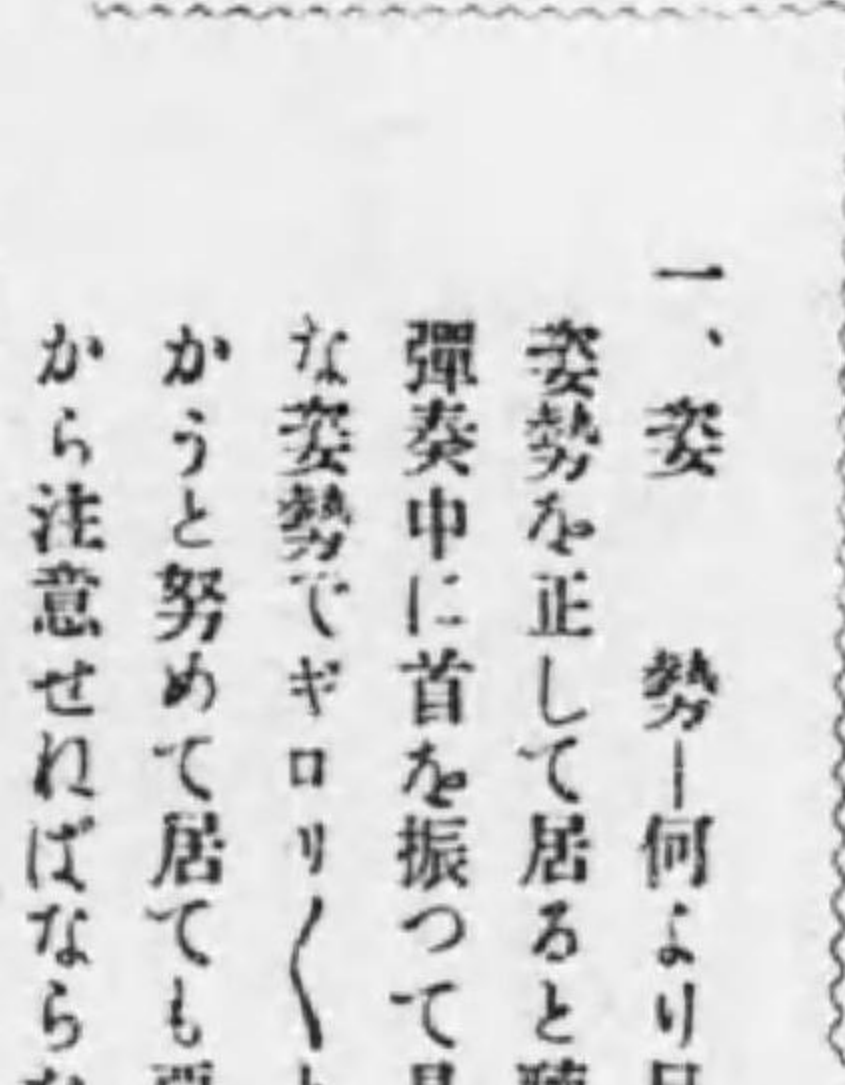
一、聲の練習法—聲は必ず腹から出さぬと聽者に感動を與へない、聲の悪る人でも毎日練習さへ怠らなかつたら自然に出る様になるもので

ある、又どれ程調子の高いよい聲の出る人でも調子の底い先生に習つて居ると知らず／＼に調子が底くなるものであるから自宅で稽古する時毎日一回だけ演奏會に演奏するつもりで自分の調子より半本又は一本ぐらゐ高い調子で一時間ぐらゐ練習するのがよい、然らば知らず知らずの内に聲量が増して来る。

左に音聲研究に際して注意すべき條項を示して置く。

- 一、酒、酢、わさびの如き刺激物を飲食せざる事。
- 一、夜更かし及び朝寝をせざる事。
- 一、演奏せんとする前多量に喫煙すべからず（禁煙に越す事無し）
- 一、茄子の類を食さぬ事。
- 一、演奏せんとする五時間程前に肉食する事。
- 一、演奏せんとする三十分程前玉子を食する事。
- 一、演奏前には端座してなるべく身體を安靜にしてあまり歩行等せぬ事。

298
89



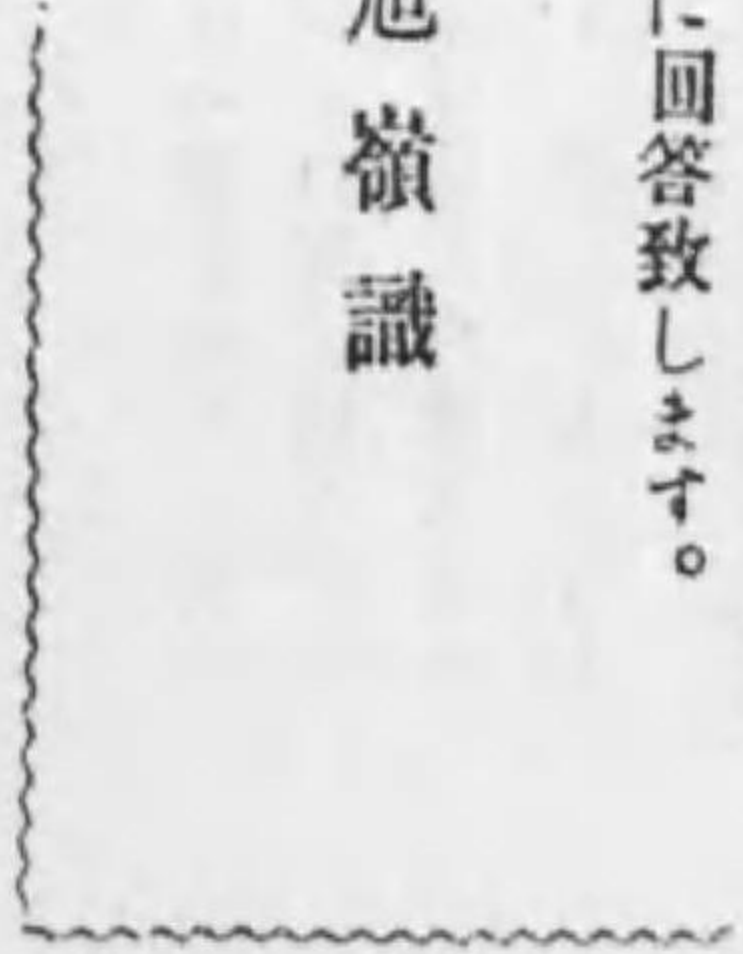
一、姿 勢—何より目立つて見えるのは演奏者の姿勢である、端然と姿勢を正して居ると聴者の方でも勢ひ眞面目に成つて聞く氣になるが演奏中に首を振つて見たり歌曲が佳境に入りつゝある場合に不眞面目な姿勢でギロリ／＼と聴者の顔を睨廻したりすると折角身を入れて聞かうと努めて居ても悪感情が起つてつひ悪騒ぎの一つもする様になるから注意せねばならない。

一、歌詞の間違—琵琶の演奏者には歌詞の間違つた處を平氣でやつて居る人が有るが心ある人が聞いたらよい物笑ひになるから充分に文章は注意して間違ひの無い様にせねばなりません、本書に關し曲節の不審等有し時は切手封入の上御聞き合せに成れば直ちに回答致します。

綠水會長

東區上本町七丁目

水也田旭嶺識



終

